

21世紀水倶楽部だより

発行：特定非営利活動法人 21世紀水倶楽部
発行者：安藤 茂
編集：特定非営利活動法人 21世紀水倶楽部 広報担当
〒171-0011 東京都豊島区目白2-1-1
URL <http://www.21water.jp/>
E-mail info1@21water.jp

第5号 2009年3月10日号

元気を取り戻せ下水道事業

副理事長 清水 治

私は昭和38年度より始まった下水道5ヵ年計画の年に大学の衛生工学専攻に進級し、下水汚泥の熱分解処理の実験を手がけました。当時は水処理や汚泥処理がわかる人が少なく久保田鉄工(株) (現株クボタ)に入社後も大学と役所との連携による下水の高度処理や汚泥処理の新技術や新製品の開発に取り組んで来ました。研究所からラインに配属されてからもこの関係は続いております。



今、世界の景気が大揺れしています。この景気対策には国のインフラ整備の下水道事業や環境事業を産官学一体となって進める必要があります。お金がないのではなく、お金を動かさねば景気はよくなりません。私どもの納めた機械もすでに耐用年月をはるかに越えております。環境問題はエネルギー問題と一体でなければなりません。そのためにも下水道事業にはやらねばならないテーマが山ほどあります。

資源を持たない日本が食べていくには技術で勝負するしかありません。21世紀水倶楽部は産官学一緒になって、過去の「思い出の記」や将来を見据えた水に関する技術検討会など、自由にテーマを決めて講演会やHP活動が行えるNPOです。興味ある人は是非討議に参加してください。

(ダイネン(株)顧問)

2008年度活動報告

下水道管路水理学を考えるシンポジウム報告

山崎 義広

日本の下水道学界や業界において、欧米に比較して下水処理には陽があたるといっても良いぐらい様々な研究発表や現

場見学会等が行われています。

一方、下水道管路やその中を流れる下水に関する水理学について、日本では研究などをされている方は少数派です。しかし、近年降雨特性の変化や現場事故などでマスコミに取り上げられることなどが多くなり、専門家も含めて興味をもたれる方が増えてきたのではと感じます。特に、今日的課題である国民の「安全、安心、環境保全」のためには、今後ますます重要な分野ではと思われます。しかし、残念ながらこの研究・開発においては質量ともにさびしいのが現状です。

そこで、この現状を打破すべく起爆剤として今回のシンポジウムを開催しました。



当初、はたして何人の参加者が集まるか心配しましたが、予想に反して70名の方が集まり砂防会館の立山がぎっしりとなり関心をもたれている人の多さに少々びっくりしました。参加者の内訳は、コンサルタントが36名、国総研・下水道新技術推進機構・日本下水道協会・日本下水道管渠推進技術協会等公益法人の方が9名、メーカー・ゼネコンが11名、そしてうれしいことにマスコミの方が4名、その他フランス人も含めて10名でした。

最初に、田中修司(日本下水道管路管理業協会専務理事)先生より「設計指針だけに頼っていいのか」、渡辺政広(愛媛大学工学部副学部長兼環境建設工学科教授)先生より「マン

ホール蓋はなぜ飛ぶのか」、巽良雄（NPO21世紀水倶楽部理事）先生より「現場で何が起きているのか」と題する基調講演がありました。

次に全体討議で、今年はManning公式誕生120周年になる節目の年で今回のシンポが下水道管路水理学の研究をさらに前進させる契機にしたいという思いを共有しました。

その他、Hager水理学の翻訳の経緯が紹介され、粗度係数の議論があり、下水管渠水理実験の大切さなどの意見が熱っぽく交わされました。

さらに、シンポジウム閉会后、参加者より「何故、下水管渠の接合は水面接合が理想的と教科書には書いてあるのに、結果的にそうしないのか」といった素朴ではあるが下水管路の本質が隠れているテーマなどを議論したいといった意見もありました。このような下水管路の本質をついているようなテーマを題材にして下水道管路水理学を考えるのは面白く、そして参加者の裾野を広げていってほしいと感じたシンポジウムでした。

このシンポジウムの詳細は報告書として印刷し、希望者には配布を予定しています。希望の方は中川理事にご連絡ください。

E-mail: y-nakagawa@gucenter.co.jp

会員だより

酔童感話 第0話

「水道閑話：と読み替えて下され。はじまりはじまり」

齋藤 均

さてさて、良識ある諸兄が集う「NPO法人21世紀水倶楽部」の「水倶楽部だより」に、このような題名の駄文を載せてもいいという許可を頂いたので、ちょっと傾（かぶ）いてみようと思います。さて私、在居は陸奥仙台。初代「伊達者」の名乗る伊達政宗公を非常に崇拜しており、まあ、会員間の「連絡だより」にちょっとした息抜きがあっても良からうと、勝手に始めさせて頂く次第です。

表題「酔童感話（すいどうかんわ）」は、東北の田舎者である私が、酔っ払った勢いで感じた事を、「上下水道・環境」と言ったキーワードで切って書いていこうという物です。稚拙なエッセイとでもお考え下さい。

さて、下水道業界の標準雑誌である「月刊下水道」誌に、かつて「下水道設計たちばなし」と、こちらは下水道施設を

設計するに当たって、苦勞した事や失敗談、後で考えれば別案にすれば良かったといった様な話が、ちょっと面白おかしく連載されており、毎号楽しみにしていたものです。この「たちばなし」の筆者もペンネームに「伊達正宗」（正の字になっている）を使っていたのも縁でしょうか？

伊達正宗氏が仙台在住の人かはともかく、伊達者であることは間違いない。で、私も及ばずながら、現伊達者の一人として、「伊達萩丸（だてはぎまる）」を名乗らせてもらう事にします。以後、ペンネーム「伊達萩丸」=齋藤 均でよろしくお願ひします。

「萩丸」注）とつけたのは、私がまだ若輩者である事から、昔武将の幼名には「〇〇丸」とつけていた事にちなみます。かの政宗公も幼名は「梵天丸」。技術者として未熟な私もペンネームは幼名「萩丸」で名乗ります。

つまり「伊達萩丸」イコール元日本下水道事業団職員、現技術士事務所きんぶろ総括主任のNPO法人21世紀水倶楽部会員：齋藤 均です。以後毎回断りを入れるのも大変なので、今後はペンネーム：伊達萩丸を使わせて頂きたいと考えています。

とまあ、こんな具合に始めてしまいましたが、出来れば不定期でも連載形式をとりたいと思います。また水環境・廃棄物・環境等とは全くかけ離れた社会事情に関する不平不満になってしまうかもしれませんが、とりあえず、続く第1話目の幕を開けたいと思います。題名は「戸田パール？ 埼玉県で真珠が取れるの？」の予定です。では、次回をお楽しみに。
(^_^)v

第0話終。

注）萩丸「はぎまる」：我が母校、東北大学謹製の天下一の銘酒。また大学の校章の名前「萩に丸印」でもある。銘酒萩丸は東北大学川渡(かわたび)実験農場で栽培された、無農薬有機栽培の最高の酒米に、醸造に適した酵母を厳選し、宮城の銘酒一の蔵の杜氏により宮城の銘水で仕上げたものです。その味は「上善如水」。冷やした萩丸を凍らせたガラスの猪口でクイツとやると最高です。で、人間の萩丸の方は？ 酒蔵でまだ寝ている状況です。



山の国・ブータン紀行（その1）

望月 倫也

インド亜大陸の東側に北に食い込むベンガル湾、その最北のバングラデシュの海岸から北にむかうと 500Km も平地が続く。この南北にも広大なベンガル平野のつきるところからいきなり山地となり、そこが山の国・ブータン王国である。

国境のインド側のジャイガオンとブータン側のプンツォリンは一つの市街地をなしているが、町境すなわち国境を通る街道にはブータン様式の屋根を持つ門構えが屹立しているので、わずかに区別が出来る。ここ平野のつきるところの海拔



はわずか二百メートル。ブータンの北縁、中国との国境のヒマラヤ山脈は 7,000m 級だから、この間の急峻な山地がブータンの領域である（南北 150Km、面積は九州と同程度で、横にした形状）。まるで、インドは平地、ブータンは山地と、規則があるかのようだ。

このプンツォリンの国境の門からわたしたちのブータンの旅は始まった。ブータンには平地は許さないごとく、すぐに急坂が始まり、日本製の中古のマイクロバスはエンジン音を高め、高度をみるみる稼ぐ。つづら折りの山肌の道から振り返ってベンガルの広大な平野を眺めると、幅広い河がいくつも望める。河々は、峡谷からいきなり平原に解き放たれ、自由気ままに流れているようだ。これら河々の浸食・堆積の作用による扇状地平野がはるか先の海まで続いているのだ。見えないが、下流の本川はブラマプトラ川。チベット高原を水源とし東流するが、ヒマラヤ山脈の東端を折り返し西流後、大河ガンジスとは海の一歩手前のバングラデシュで合流する。こちら大河と言うにふさわしい。ブータンの山肌を浸食した幾多の河川は南流し、ベンガル平野を潤したのち、こ

のブラマプトラ川に至る。



山肌の屈曲路はいつしか千尋の河谷の急峻な山腹を縫うようになる。道路の舗装はいつからか一車線分しか確保されなくなり、それも、重車両による破壊の穴（ボコ）の連続となり、あるいは、山側斜面の土砂崩落により泥濘と化している。ブータン人のドライバーは低速重車両を巧に追い越すなど、運転技量はなかなかのものだったが、こうなると、満足なスピードが出せない。ブータンの人口は 60 万人だが、どこに彼らが住んでいるのか、その都市の平坦地にはこれではいつまでも到達できないのではないかと悲観的になる。山深くの平家落人の里のようなものなのだろうか、と想像した。（つづく）

編集幹事のあと整理

- 巻頭は清水新副理事長の挨拶文として「元気を取り戻せ下水道事業」を掲載したものです。技術立国・日本でNPOの役割など抱負と会員への要望を述べられています。
- 前号から会員だよりのコーナーを立ち上げました。齋藤会員より「連続もの」水道閑話の投稿がありました。何話まで続くのでしょうか？次号以降も楽しみにお待ちしております。
- 齋藤均(次号以降はペンネーム:伊達萩丸)氏は仙台在住です。ほかにも遠方のかたはこの「たより」で近況などお知らせいただくのが都合なのかもしれません。齋藤氏に続いて奮ってご投稿ください。
- 最後の拙文は「埋め草」です。最終3頁目を有効利用するため、ネット公開済みの「ブータン紀行」の冒頭部分を再掲載しました。

編集幹事・望月